



会員 各位殿

令和4年2月22日

NPOソフトインダストリー研究会

巻頭言

理事 奥原 英彦

「貝塚」に見る「地球温暖化と寒冷化」のサイクル

10年ほど前、犬との散歩中、目黒区東山に遺跡と言えないほど保存状態の悪い「東山貝塚跡」があることに気付いた。貝塚は、人間の営みの証として形成されるので、理屈で言えば、目黒区東山の台地近くまで海が来ていたことになる。しかし、東京湾から10km程も内陸に入り込んだ目黒区の台地に、なぜ貝塚があるのだろうと不思議に思い、少々調べてみた。

すると、東京都だけでも100カ所以上の貝塚があり、しかも目黒区のように海岸部を持たない「海なし区」にも多数あることがわかった。さらに、調べると次の通りであった。

約2万年前の地球寒冷化時代には、今から100m程海面が低かったものが、1万年ほどかけて地球温暖化に向かい、次第に海面が上昇。約7000~8000年前の縄文前期時には、海面が今から約16m上昇。海岸が東京湾の内陸深くまで押し寄せていた。

これを「縄文海進」というが、当時は関東平野のかなり深いところまで海進していたらしい。

例えば、渡良瀬遊水地に近い群馬県板倉町には「寺西貝塚」という大規模な貝塚遺跡がある。

この貝塚は縄文人が群馬県板倉町近くで海辺の生活をしていた証拠になる。

その後、今度は5000年前頃から地球寒冷化に向かい、海岸線は次第に後退。貝塚の分布も、現在の海岸線に近づいてくる。ちなみに、明治10年にアメリカ人モースが発見した大森貝塚は、縄文後期(約2000年前)に形成されたと言われている。

このように、約1万年前からの日本列島において、遠い祖先の縄文人から現代日本人までが、地球寒冷化と地球温暖化のサイクルを経験して来たことを、犬の散歩でふと疑問に思った「貝塚」が教えてくれたことになる。

その後、地球環境の観点から、人類の炭素排出活動が地球温暖化を加速するのをストップするという、いわゆる「脱炭素運動」が盛んになるのを見るにつけ、個人的には、違和感を感じざるを得ない。

人類の活動とは関係なく、地球は数千年単位で温暖化と寒冷化のトレンド・サイクルを繰り返している。現在のトレンドが、寒冷化か温暖化のどちらに向かっているかは、議論の余地があるところではあるが、このサイクルを引き起こすメカニズムが解明された上でないと、脱炭素の理屈と理由が理解できないからである。

もし、百年単位の温暖化と炭素排出量の増加が相関を持ったとしても、单なる「疑似相関」ではないだろうか。だいたい、炭素は太陽光を遮るので地球は寒冷化するのではないか。

人類は、千年単位の温暖化と寒冷化のトレンド・サイクル、その中の百年単位の気温の変化にも柔軟に対応し、生き延びてきている。

DNAゲノム解析によると、縄文人と現代日本人との共通性は12%あるとのことで、偽装熊本産アサリ事件を起こすほど、現代日本人の貝好きは縄文人の遺伝かもしれない。

以上

SORUCA 通信 contents

- 卷頭言 「貝塚」に見る「地球温暖化と寒冷化」のサイクル / 奥原 英彦
- デフレ経済脱却期の産業政策
- ～「業界横並び方式」から「オンライン雪だるま方式」へ～ / 奥原 英彦
- スポーツとカネ（マネー） / 坂倉 海彦
- 人生100歳 / 白石 嘉宏
- 編集後記 / 白石 嘉宏



デフレ経済脱却期の産業政策 ～「業界横並び方式」から「オンライン雪だるま方式」へ～

奥原英彦

○ 世界で唯一の「不景気(デフレ)経済」を続ける日本経済

1990 年のバブル崩壊からの「失われた 30 年」で、日本経済はジャパン・アズ・NO1 の座からズルズルと後退を続けており、未だ、復活に向けた出口戦略が見出せません。

1995 年から 2015 年の 20 年間の経済成長率(名目 GDP)は、世界平均が(プラス)139% であるのに対して、日本だけが世界最低のマイナス 20%でした。

その結果、【需要<供給】(需要不足)の「デフレ経済」に移行しています。しかも、先進国の中で、唯一、日本だけが 20 年以上の長きに渡って、デフレ経済なのです。

デフレ経済になったのは、需要が伸びないからです。それは、バブル崩壊の反動で、1990 年の以降、国の政策が「インフレ抑制型=需要抑制型、供給増加型」になりましたが、それが効きすぎてデフレ経済になってしまっても、国も地方もインフレ抑制型の政策からの変更を行わないために、ずっと日本全体がデフレ経済(GDP の減少)を続けているのです。

○ デフレ経済における中級品(標準品質品=横並び品)振興策は無意味

【需要<供給】(モノ余り)のデフレ経済下では、中級品(標準品質品=横並び品)は、「同品質」であっても「オープン価格」となります。「価格を下げないと売れないからです。

また、最近では、物流・情報革命が進み、世界中の財やサービスが「ワンクリック」で瞬時にオーダーとデリバリーが完結する時代が到来しています。

同レベルの競合品が国内外に多数乱立している状況下(【需要<供給】(モノ余り)の環境下)では、たとえ「いいものでも(値下げしないと)売れない」時代なのです。

これでは、付加価値を高めることは困難になり、生産者(事業者)は赤字基調、産業は衰退し GDP は低迷していくことになります。

デフレ経済下においては、消費者にとっての「横並び品」を振興する産業政策が、ほとんど意味を成さない理由が、ここにあります。

○ 儲かる産業政策=「個性(ユニークさ)」を追求する産業政策へ

そこで、最近になってやっと(デフレ経済下で生き残るには)、国も地方も「稼げる産業」を育成・実現することである、との方向転換の必要性が指摘されてきました。

「稼げる」には、財やサービスの「個性(ユニークさ)」を最大化させる、つまり、(世界中や日本中を探しても)類似品や横並び品がどこにもない「個性(ユニークさ)」を追求し、高くても欲しがる消費者を創り出す産業政策(ブランディング政策)のことです。

スイス製の時計が、同性能である日本製の時計の何十倍~何百倍の価格でも売れるのは、そのスイス製の時計のブランドが「(世界一)抜きん出て個性的で(ユニーク)」であり、

しかも、手作りのため数量が限定されている【需要>供給】(モノ不足)のためです。

このため、いくら価格が高くても、そのブランドを購入することで買い手は十分に満足するのです。

○ 地域の個性化を追求する産業政策

イタリアのファッショでは、ミラノ、フィレンツエ、ローマ、ナポリ、シチリアなどの地域毎に、「ミラノ仕立て」などの特色ある仕立て店(サルトリア、テーラー)が数多く立地しています。

儲かる地域産業を目指すには、スイスの時計、イタリアのファッショ、フランスのワインに見られるブランドのように、「個性化し高付加価値(高価格)化」を目指し、生産プロセスへの従事者を「地域で育て地域で働く」システムを作る(ローカル(自律(自立個性))化することが大事なポイントになります。

その地域では、オンリーワンとして成功した企業(名人、名工)のノウハウを、地域の同僚(企業)が模倣する「(地域)同僚効果」によって、地域の同業種全体が「雪だるま式」に「豊かさを生みだす力」を獲得していくプロセスの存在が知られています。

日本でも、西陣織(京都市)、輪島塗(輪島市)、九谷焼や有田焼などでは、この「地域で育て地域で働く」システムと、「(地域)同僚効果」「雪だるま方式」が出来ていると考えられます。

○ これからの産業政策=付加価値増大を目指すオンリーワン企業雪だるま政策

地域で働く個々人の個性を、商品やサービスに反映させていくことで、他の地域では真似のできないユニークな高付加価値が生まれて(クリエイトされて)くるのです。個性化することで、標準品を生産するより「数量」は少なくなりますが「高価格化」することで、付加価値額の総和(地域GDP)は、十分に増加(成長)する結果に改善されます。つまり、地域産業に稼ぐ体质が生まれ、事業者での利益額は多くなり、地域(雇用者)

への所得分配額、つまり「一人当たり(GDPの)分配所得」が増加し「豊かさを生みだす力」が高まるのです。これからの中や地方の産業政策は、今までの「業界横並び方式」から脱却し、高付加価値化に成功した「オンリーワン企業雪だるま方式」に転換する必要があります。一言でいうなら、「出る杭を伸ばす」産業政策と言えます。

この出る杭の企業(名人、名工)には、シロカ(伊賀焼土鍋の79,800円の炊飯器の企画・販売:東京都)、須藤物産(最高糖度20度トマトを高価格販売:長野県)、山梨銘醸(スーパークリング低アルコール日本酒を1万円の高価格帯で販売)などがあります。

デフレ経済脱却期の産業政策のシーズは、このような足元の地域を探すと、意外と多くのいることに気付かされるはずです。

以上

スポーツとカネ（マネー）

坂倉海彦

1994年のノルウェイ・リルハンメル冬季オリンピックの1年ほど前のこと、知り合いの中堅広告代理店の社長から服部セイコー（現セイコーホールディングス）の宣伝部長に会って欲しいという連絡があった。お会いしてみると「リルハンメルオリンピックの公式計時担当（オフィシャルタイムキーパー）にセイコーが選ばれたが、自分は冬のスポーツの事をよく知らないのでアドバイスなどを願いしたい」との事、もしお力になれれば喜んでお手伝いしますとお受けした。その時知ったのがスポーツの大きな大会ではどこかの時計メーカーがオフィシャルタイムキーパーになって競技の計測業務を行い、その対価としてその時計メーカーのブランド露出の権利が与えられるという事、オリンピックのオフィシャルタイムキーパーになると全世界にブランドが露出されるのでそのマーケティング効果を狙って世界中の時計ブランドが競っているという事、しかし時計メーカーとしての本音を言えば時計（ウォッチ）の市場として重要でない途上国も含めてブランド露出をする夏のオリンピックのオフィシャルタイムキーパーにはあまりなりたくないが、時計の市場と重なる先進国主体に露出の出来る冬のオリンピックのオフィシャルタイムキーパーになる事のマーケティング効果の旨みは大きく、各社がその座を巡って大変なしきをけずっているという事などである。このことからもスポーツには様々な面でカネがかかるのでそのカネをどう調達するかを考えないとスポーツという行為も、そのスポーツを大きな単位で競う様々な大会についても議論が出来ないことが分かる。近年はオリンピックが巨大化してIOC（国際オリンピック委員会）が世界的な大企業と連携して大きなカネを動かしているが、オフィシャルタイムキーパーもワールドワイドオリンピックパートナーとして巨額な長期契約（2032年まで）をIOCとの間に結んでいるスイスのオメガが昨年の東京大会も含めて独占している。

余談であるが1972年の札幌大会以外に冬のオリンピックの実績のなかったセイコーがリルハンメルのオフィシャルタイマーに選ばれた理由は「ヨーロッパではノルウェイという国が酷く田舎だと馬鹿にされていて、スイスの時計メーカーは自分達が選ばれるのが当たり前だという態度を取ったためこれにカチンときたノルウェイオリンピック委員会が敢えてセイコーを選んだらしい」というビックリするような話も聞かされた。その後2回ほどリルハンメルを中心にノルウェイに行き多くの人にお会いしたが、確かにノルウェイ人はお人善しの親日家が多く、自分達を田舎者と馬鹿にする高慢なスイスの時計メーカーに一泡吹かせてやろうと日本のセイコーを選んだのも納得が出来て結構痛快な思いであった。僅か30年ほど前はオリンピック関係でもまだまだ人間臭い決定がされていた時代だったのかも知れない。またノルウェイ人はスキーが大好きで、町を歩いていると「君は日本人か？サッポロの笠谷は素晴らしい！！」と言われた。72年札幌オリンピックから

20年以上も経っていたのに。今思い出してみると一連のこの思い出の中にスポーツに関わるヒトの部分と権利を伴うカネの話が凝縮されているようにも思う。

スポーツも含めて文化行為にカネをかけられるのは衣食足りた上での余裕をもつカネモチだけのはずである。そして時代と共にカネモチの形は変わる。原始の時代何らかの原因で権力を得る地位が継承され、富が蓄積し豪族、貴族、王侯が生まれた。最初のカネモチは権力者であり王侯貴族だったと言えそうだ。時代が下がると宗教が生まれ宗教団体がカネモチになる。そして市民社会の入り口では商人層がカネモチに加わり、産業革命を経て産業資本家が次第にカネモチの中心になる。大きな建造物の事を考えると分かりやすいが、古いものは権力者の宮殿や墓だったが、次第に寺院が加わり、近年建てられたもの多くは事業のために使われる巨大ビルや庶民向けの多様な施設である。即ち言ってみれば生存のために必要となる以上の富がないと文化は生れないし、その時代の富を生み出すカネモチの構造の変化によって文化の形は変遷していく。

スポーツは比較的歴史の浅い文化だが19世紀以降にスポーツを支えて来たカネモチがどのような人々であり、これから時代にどのようなカネモチがスポーツを支えていく事になるかを考えないと良い形でのスポーツ文化の発展はないと思う。近代のスポーツの原型の一つがヨーロッパの近世の貴族階級の趣味、嗜みとして生まれたものが中心のように思う。彼らは資産を持っているから趣味としてのスポーツを楽しめたと考えられるが馬術、ポロ、登山などがその代表例ではないだろうか。オリンピック開催を呼びかけたクーベルタンもフランスの男爵であったが彼はオリンピックに女性が参加する事や、プロ化に反対であったと言われる。彼にとってのオリンピックはあくまでも貴族の趣味としてスポーツを捉え、その中で平和主義を唱えたのである。貴族というスポンサーがいた時代のスポーツはアマチュアであるべきであったが、20世紀半ばになるとその理念は通用しなくなってきた。スポーツの影響力が大きくなり、統治や政治の体制側がスポーツを利用し始めたからである。ナチスがベルリンオリンピックをナチズムの宣伝のために利用した事や、第2次大戦後の社会主義陣営が実質的に国が養成している選手（国が生活を保証している実質的なプロ選手、ステートアマ）をアマチュアとして国際大会に参加させ国威発揚を図るようになったからである。このアマチュア至上主義はスポーツ界にとって重要なスポーツとカネの話を長年にわたって封印してきたように思う。今でもアマチュアスポーツは純粋で気高いもの、スポーツにカネの話を持ち込むべきでないという感情を多くの人々が抱いているし、メディアにその様な論調を見る事すらある。然しスポーツとカネは両輪になって動いていかないと良い形の、そして時代に求められるスポーツを生み出せないだろう。

さて20世紀中盤以降大きな戦争が無く経済成長が続き、世界の人々にとって自立と平等が正義となってきた時代にカネモチに成長したのは世界中の庶民層、つまり大衆である。もちろんスポーツには公共や教育の部分も含まれるが、今後ポスト工業時代に向けてより重要なのは文化、レクレーション、余暇としてのスポーツであろう。より大きな感動を生むスポーツを盛んにして人々の心を豊かにし、新しい富を生み出す産業としてのスポーツを発展させるためにスポーツとカネの関係がますます大事な時代になって行くと思う。

人生 100 歳

アメリカでは心臓移植に豚の心臓が使われ手術後すでに 1 ヶ月を経過したが手術を受けた人は元気だという。すでに昨年の 10 月 22 日にはブタの肝臓を人に移植し成功している、続いて豚の腎臓の移植が間もなく行われるという。今まででは異なる個体の臓器が移植されると拒絶反応が起きるのでその対応が大変だったし、長く命を保つことが出来なかつたが遺伝子操作により拒絶反応が起こらないようになったとのこと。私は 13 年前に心臓手術を受けたがその時に心臓弁を豚の弁にするか人工のものにするかと聞かれた。だからこの時点で豚の臓器の一部、弁が心臓治療に広く使われていたのだと解る。

現在世界での最長寿者は昨年の 9 月の誕生日に 119 歳になった田中力子（カネと読みます）さん。体調の良い日は体操をしたり計算などして過ごしえ居るという。元気でボケていません。

昨年 9 月日本の 100 歳以上人口は 8 万 6510 人。コロナの中だが前年よりも 6 千 60 人増えた。10 万人を超えるのも時間の問題でしょう。

人の世話にならずに暮らしが出来る健康寿命と平均寿命がよく取り上げられるが令和 2 年の公表資料によれば男性は平均寿命 81.64 歳、健康寿命は 72.68 歳。人の世話になるのが 8.96 年。女性はと言うと平均寿命が 87.74 歳、健康寿命は 75.38 歳、人の世話になるのが 11.36 年。平均寿命では女性の方が男性より 6.1 歳寿命が長いが健康寿命で見るとその半分の 3.7 年。さらに人の世話になる期間は女性の方が 2.4 年長くなる。

これからはやがて心臓をはじめ逐次豚の臓器が人への移植に使われて行くようになるのでしょう。癌の治療でも抗がん剤や放射線治療をしないでも臓器を入れ替えることで命を救われるケースも出て来るのかも。そうなると長く生きて居たい人は 100 歳目標ならばそう遠い話ではなくなる。ただし、脳みそだけは無理でしょうね。豚の脳みそと脳梗塞などで傷んだ自分の脳を取り換えるとしても。でも先々は AI を補助的につけることで日常生活ならかなり適応して送ることが出来るようになるかも知れません。

人を生かし続けるというのが産業の一つとして大きく発展することは間違いない所でしょう。目の前には豚の遺伝子を組み換え何時でも人の臓器と置き換えられる豚を飼育するという事業を展開する事業者が出てきています。SF 的に考えれば、オリンピック選手の短距離走はチータの身体から早く走ることが出来る部分を抽出して移植するとか、重量挙げなら象の鼻の筋肉を移植とか。

まあ、想像はこれぐらいにして、すでに中山伸弥教授により IPS 細胞の活用範囲は急速

な広がりを見せていましたし、この再生医療は従来の治療という世界を大きく広げ不治の病を持つ人たちに希望を与えていました。

加齢とともに傷んで行く身体を補植・再生しようとする対応には夢が広がりますが一方これとは別に今回のコロナのようなウイルスやマラリアなど原虫やコレラなど病原菌による疾病があります。

カタリンカリコ研究者により今回のコロナには有効なワクチンが短期に大量に供給されました。このワクチンはmRNAと呼ばれている通り遺伝子由来の物です。でも原虫や細菌性疾患には人の遺伝子を操作して対応しようとしても現状では無理です。此の対応には生活環境を良くすることが求められます。

生活環境を良くすると言うと、菌が付かないように虫が増えないように綺麗に清潔にしようとします。しかし、私達は自身の身体には細菌があるから生きて居られるということを自覚しなければなりません。

ビフィズス菌が発酵食品が身体に良いと言われていますがそれらは菌です。私の好きなお酒も酵母菌によって醸されます。それぞれの生物にはそれぞれが必要とする菌があります。コアラはユーカリの葉で生きて居ます。パンダは笹を食べて生きて居ます。彼らにはユーカリや笹を消化し栄養に変える菌を腸の中に持っているのです。この菌は生まれて来る時に産道を通る時にさらには母親のウンチにより体内に取り込まれます。生物の生まれる順を見れば単細胞生物から多細胞生物になって行きますがこの進化の過程で原始的な生物を取り込んで行くことで多細胞生物は進化します。

ですから私たちの腸の中にはおよそ1000種類約100兆個の菌による腸内フローラが整うことで栄養を摂取し成長して行きます。100歳までも。

腸の中の菌がバランスの取れた状態を維持すること、それにより細胞のミトコンドリアが活発になり健康な身体になります。100歳の基。

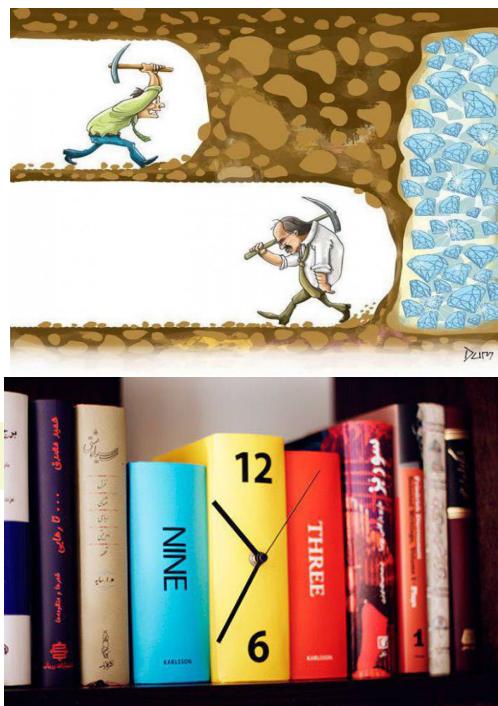
生活環境のことを今回は菌のバランスということの話しか出来ませんでしたが、腸内フローラ同様、私達の生活空間が多種多様な動植物で満たされていること。それが良い環境ということになります。ピカピカ・つるつる・フィルターのついた空気清浄機が良い環境と言う概念は今世紀の半ばには変わるでしょう。

白石嘉宏

<編集後記>

オミクロンによる患者の先が読めない中蔓延防止がさらに3週間延長が決まった。すでに丸2年を超えてこのような処置が間隔を開けながら続いている。これって結局は集団感染になって行くのと変わらないのでは。問題は死者を極力出さないという一点に絞ってあとは個々人に行動の自由を与えてはどうだろうか。三密など基本的な注意事項、コロナに対する対応情報を知らせた後は、自分の身は自分で守る、自己責任として個々人の裁量に委ねて良い時期に来ているのでは。

白石 嘉宏



「特定非営利活動法人ソフトインダストリー研究会」
SORUCA 通信(2022年冬号) 広報誌

発行責任者 白石 嘉宏

発 行 所 NPO ソフトインダストリー研究会
東京都新宿区矢来町 47 番地
FAX: 03-3266-1764

<https://soruca.org/>

編 集 人 長谷川 賢

発 行 日 2022年2月22日



発行元:NPO ソフトインダストリー研究会